第３章　プロジェクト・キャンプの実地研究

１節　2011 年度の実践と振り返り

2 年次の準備

初回のプロジェクト・キャンプは探究エリアを東北地方とした。入学段階で臨時に徴収する費用の見通しを示しており、そこではプロジェクト・キャンプは「関東・東北で実施」とうたっていたからである。さらに、前述のサイエンス・キャンプが栃木県茂木町で行われたため、費用負担を抑えるために東北地方で実施することにした。

しかし東北地方といっても広域である。そこで、担当の教員が過去の校外学習の経験を踏まえて岩手、山形、青森・秋田の 3 エリアに絞り、産業・文化・自然などのテーマでどのような学習が可能であるか、オリエンテーションでプレゼンした。次に、生徒を希望によって 3 グループに分け、探究エリアを絞り込むための学習を行わせた。学習結果はクラス内で発表し、これを踏まえて投票によって青森・秋田に決定した。

写真4・探究エリアに関するグループ発表

本来ならばここまでの過程を中間報告として 2011 年 3 月 12 日の学習発表会で報告するはずだった。しかし前日の 3 月 11 日午後 2 時 46 分、東北地方を激震がくり返し襲った。いわゆる東日本大震災である。授業が行われていたため生徒は学校におり、命を失う者が出なかったのは幸いであった。だが寸断されたライフラインは長期間にわたって復旧しなかった。生徒や教職員の中には、家族・親族や家屋に甚大な被害があった者が少なくなかった。学校も非常に大きな被害を受けた。このため年度末の学事は全て停止せざるを得ず、新年度も通常より遅れてのスタートとなった。

当然ながらプロジェクト・キャンプに向けての事前学習もこの中断によって大きな影響を受けた。本来ならばすぐにチームを編成し、プロジェクトのテーマを決める段取りであったが、中断によって空隙が生じ、以後の準備も遅れることになる。

3 年次の事前学習

3 年生になり、授業が行われるようになって復活した「探究」で最初に行ったのは、チーム編成である。教員から自然、伝統・生活、歴史、街づくり、文学、産業のカテゴリーを示し、関心のある生徒たちがそれぞれの分野を選択してチームを編成し、プロジェクトに着手したのが 5 月である。

5 月末から 6 月にかけては春季生徒総会、市中学校総合体育大会、前期中間考査などがあってプロジェクトを大きく進めることはできず、本格的な事前調査に入れたのは当初の計画より大幅に遅れて 7 月になってからである。夏休みがあけるとすぐ尚絅祭（文化祭）があって、事前調査と行動計画がまとまり始めたのは漸く実施一ヶ月前の 9 月になってからであった。同時に訪問・インタビュー先へのアポ取りも平行して進められた。前期期末考査をはさんで、生徒も教員もまったく余裕のない状況であったことが回想される。震災の影響はこのようなところにも現れた。

写真5・花岡事件フィールドワークの様子

プロジェクト・キャンプ実施

キャンプ全体のスケジュール及び各チームのテーマと課題、行動計画を次表に示す。なお、各々のテーマとは別に、事前学習の過程で半数以上のチームが希望したので、1 日目に全員で秋田・大館市で花岡事件の学習を行うことにした。本校はかねて平和学習に力を入れており、かつ

て青森・秋田の校外学習で花岡事件関係の遺跡の入念なフィールドワークを行った経験があったためである。

表 3　2011 年度プロジェクト・キャンプのスケジュール

10/13(木)	8:30	学校出発（貸切バス）
	13:30	秋田県大館市花岡町着
	16:00	クラス全体研修（花岡事件フィールドワーク／富樫康雄氏）
	18:30	ホテル着（青森国際ホテル）
	19:30	夕食（ホテル）・クラス・ミーティング
10/14(金)	7:00	朝食
	8:00	ホテル発（時刻はグループによって異なる）
		全日グループ研修（昼食はグループごとに外食）
	18:30	ホテル着
	19:30	夕食（ホテル）・クラス・ミーティング
10/15(土)	7:00	朝食（バイキング）
	8:30	ホテル発（時刻はグループにより異なる）
		半日グループ研修（昼食はグループごとに外食）
	13:30	ホテル発（貸切バス）
	18:30	学校着・解散

表 4　プロジェクト・テーマと行動計画

グループ	課　　題	訪問地・調査内容
A 班 （自然）	■世界遺産に登録された白神山地の植物は、宮城の川や滝の近辺にある植物とどのような違いがあるのか	白神山地、同ビジターセンター（見学） 暗門の滝　第 3（トレッキング調査／インタビュー） アクアビレジ ANMON（暗門の滝への拠点）
B 班 （伝統・生活）	■立ねぶた、ねぷたの歴史 ■青森の伝統や歴史	立佞武多の館（見学／インタビュー） ねぶたの家ワ・ラッセ（見学／インタビュー） 青森県立郷土館（見学／インタビュー）
C 班 （歴史）	■時代ごとの服装　■遺跡からどうやってその時代の形がわかるのか　■縄文時代の調理法　■有名な武将　■青森と宮城の関係 ■弘前と八戸がライバル関係にあるのは本当か、またその原因や現在の関係	弘前大学（インタビュー） 青森県立郷土館（見学／インタビュー） 三内丸山遺跡
D 班 （街づくり）	■仙台の商店街と比べて、青森の商店街にはどれくらいの人がいるのか　■商店街の実際の取組　■青森の 2050 年の未来構想	青森市役所（インタビュー／資料収集） 新町商店街（見学／インタビュー） 昭和通り商店街（見学／インタビュー）
E 班 （文学）	■太宰治について	斜陽館（見学／インタビュー） 太宰屋（見学）、青森県近代文学館
F 班 （産業）	■青森の産業について（漁業、農業、畜産業、工業）	青森県漁業協同組合連合会・青森県漁連（見学／インタビュー） 青森県庁（インタビュー） アスパム（名産調査）

例えば街づくりをテーマに選んだ D 班の場合、1 年次に地域フィールドワークで学校の身近な地域の商店街を調査した経験を元に、仙台市の街づくり及び商店街と青森市のそれとを比較したものである。事前学習として、何冊かの岩波新書を読み、仙台市と青森市のホームページから都市計画の情報を入手して比較し、とくにコンパクトシティー構想と「一店逸品運動」に取り組む青森市の中心商店街の事例

の情報をつかんだ。キャンプでは実際に二つの商店街を視察し、店に入って買い物を行い、商店会の役員さんたちにインタビューを試みたものである。

夕食後にはチームごとに振り返りの時間をもち、クラス全体に取り組んだことと成果、翌日の予定を発表した。その後チームによって必要な打合せをもって、翌日の行動に備えた。

事後まとめ　校外学習報告会

帰校後、キャンプでの調査と事前学習を総合し、学びの成果をパワーポイントにまとめる作業を行い、クラス内でチーム相互の報告会を行った。教員と生徒の相互評価により 1 位となったチームがクラス代表として全校での校外学習報告会で報告することとなり、歴史をテーマにした C 班が選ばれた。

取り組みの過程で仮説を立ててこれを検証することを指導してきたのだが、実際にはなかなか仮説を立てるにいたらず、「疑問」「問い」を持ち、現地でこれらを解決するというチームがほとんどであった中で、C 班は仮説とまでは至らないものの、一定の根拠に基づいて予測を立てたという点が評価されたものである。

校外学習報告会では、1 年生から地域フィールドワークについて、2 年生から職場体験学習について、3 年生からプロジェクト・キャンプについての報告を行った。学年が上がるに従い、プレゼンテーションの技能に著しい進歩が見られた。全校での発表会は、上級生のプレゼンから下級生が学ぶという効果もあることが改めて確認された。

初年度の振り返り

初めてのプロジェクト・キャンプでは、成果も得られた反面、課題も明らかになった。

成果としては、何よりも生徒の満足度が非常に高かったことである。緊張しながら自分たちで行動する中で、プロジェクトの問題解決のみならず、移動やインタビューが思うように行かなかったり、アクシデントに遭遇したりした場合の問題解決を協働して行ったこと、そして何よりも人との関わりである。見学やインタビュー、また移動の中で多くの人と出会い、言葉を交わし、親切に対応されるという経験をした。また、地域のためあるいは文化振興のために情熱をかけて働いている人々が語る熱い言葉に、書物やインターネットからは得ることのできない感動を覚えたことも大きかった。

課題としては、まず準備のための時間不足である。震災のため中断され、他の学校行事と重なる準備を強いられたという小さくはないが、無理なく十分な事前準備ができるよう、期間の長さだけでなく時期の設定にも十二分に配慮するべきだということが身にしみて分かった。次に、プロジェクト推進のモチベーションを維持させるため、あるいは学習意欲を高く維持させるためには、徹頭徹尾生徒たち自身の興味関心にそったプロジェクトのテーマであるべきであり、チームもそのように編成すべきだということへの、指導の中心となった担任はじめ教員団の気づきである。

これらの点は、2012 年度のプロジェクト型宿泊研修に向けて、また本調査研究の課題として明確に意識され、取り組まれることになる。

２節　2012 年度の実践と振り返り

2 年次の準備

2 回目のプロジェクト・キャンプの準備は、2 年生の 11 月から始まった。まず探究エリアをどこにするかである。記述のようにこの学年は入学した人数が 13 名と極端に少なかった（前年は 32 名）。前年はバスを借り切って移動することができたが、この人数では費用が高くなりすぎて無理である。そこで、東京を中心とする関東を探究エリアとすることにした。JR を利用すれば学生割引と団体割引を活用して費用を抑えることができるし、首都圏は JR や私鉄、地下鉄などの公共交通網が発達しており、バスがなくとも移動が容易だからである。さらに首都圏は官公庁の本庁や企業の本社・本店が多く、国立の分化し教育施設も集中しており、探究学習には素材が豊富であるという利点もあったからである。

次はプロジェクト・テーマ決めとチーム編成である。すでに述べたとおり、教員からカテゴリーを示すのではなく、徹頭徹尾生徒の興味関心に基づいてテーマを決め、チームも組むことが意欲の維持に有効であるとの考えから、今回は「関東（東京）」が探究エリアであることを前提に、各自にプロジェクトの企画をさせた。他の PBL と同様、テーマ決めはまずブレイン・ストーミングの一つであるウェビングの手法をとった。ウェビングによって取り組みたいテーマが決まったところで、これをクラス内で発表し、「仲間集め」を行う。同じテーマあるいは似通った関心の生徒が集まり、人数配分も 3～6 名と適切で、無事チームができた。

改めてチームとしてのテーマを決め、プロジェクトのゴールを設定し、プロジェクトの自分たちにとっての意義と他の人や社会にとっての意義を確認させた。後述するように、この「自分にとっての意義」「社会にとっての意義」がいまひとつ明確でなく、3 年生になって仕切り直しすることになる。こうしてインターネット等を利用した事前調査を行う。こうしてプロジェクトの構想が完成し、中間段階として 3 月の学習発表会において構想発表を行った。

3 年次の事前学習

当初の予定では、「探究」の授業は 10 月までプロジェクト・キャンプ一本でいく予定であった。しかし、人数も少なく、能力的に高い集団でもあったため、想定よりも学習が進んでいたことから、このままでは集中力を失ってだらける恐れがあると判断した。そこで構想発表をもってプロジェクトを一時停止し、PBL の個人プロジェクトに切り替えた。これは、2 年の夏以降キャリア学習や職場体験学習の関係でグループワークが多かったため、個人探究をしばらく行っていなかったからでもある。こうして文化祭での PBL 学習発表を終えた 9 月からプロジェクト・キャンプの準備が再スタートした。

実は 3 月の構想発表の質は決して高いとは言えなかった。原因を分析したところ、次の 2 点に行き着いた。一つは、テーマがあまりにも興味に偏りすぎたことである。本校の PBL の取り組みでは、「テーマは簡単には答えが出ないもの」と指導している。しかし実際には、行ってみたら疑問が解消するようなテーマが多く、この点への指導が不十分であったことを自覚したものである。いま一つは、そのプロジェクトの意義が不明確であった点である。このため全体として底の浅いプロジェクトになってしまっていると判断し、仕切り直しをした。

具体的には、まず教員団から企画書のモデルを示し、特に仮説をたてて検証する部分を指導した。次に、時間が経過して各人の問題意識も多少の変化が見られることから、チームの再編成を行った。さらに、ある程度の人数がいると他のメンバーに任せてしまってほとんど何もしない「お客様」のような生徒が出てくることから、チーム・プロジェクトの下位に個人プロジェクトを設定させた。こうして改め

て事前調査をさせ、予測ないし仮説を設定させた。

この仕切りなおしは奏功した。東京と宮城の博物館等の比較（展示内容や博物館運営）をテーマに選んだチームは、東京の博物館等の見学申し込みやインタビューのアポイントメント取りと平行して、主として仙台市内にある科学館や図書館に見学とインタビューを申し込み、実際に何箇所かを訪問した。そこで非常に親切に対応していただき、普段は見ることのできない裏側や重要な資料を相当見せていただくなどして、意外にも地方の博物館等も各々のコンセプトに従い、充実した収蔵資料や独自の展示・運営方針があることの気づきが生まれた。他チームも同様に、「気づき」をもって東京に出発することになる。

プロジェクト・キャンプ実施

キャンプ全体のスケジュール及び各チームのテーマと課題、行動計画を次表に示す。

表 5　2012 年度プロジェクト・キャンプのスケジュール

10/31(水)	8:20	仙台駅出発
	10:44	上野駅着
	11:00	ホテル着
	11:30	フィールドワーク出発（半日グループ研修　昼食は班毎に外食）
	17:30	ホテル着
	18:00	夕食
	19:40	クラス・ミーティング
11/1(木)	7:00	朝食
	8:30	フィールドワーク出発（全日グループ研修　昼食は班毎に外食）
	17:00	ホテル着
	18:00	夕食
	19:40	クラス・ミーティング
11/2(金)	7:00	朝食
	8:30	フィールドワーク出発（半日グループ研修　昼食は班毎に外食）
	14:00	ホテル着
	15:46	上野駅発
	17:33	仙台駅着・解散

表 6　プロジェクト・テーマとサブ・テーマ、訪問先

グループ (テーマ)	課　　題	訪問地・調査内容
A 班 （キリスト教大学）	■そこにしかないもの ■どのような教育をしているか	上智大学（見学／インタビュー） 恵泉女子大学（見学／インタビュー） 明治学院大学（見学／インタビュー）
B 班 （ファッション）	■人、経済、流通、海外ブランド、ペットの視点から	新宿ビックロ（見学／インタビュー） 渋谷１０９（会社訪問） ペットファースト（見学／インタビュー） 銀座ユニクロ（見学／インタビュー）
C 班 （文化教育施設）	■地元の施設と国立の施設との比較	国立国会図書館（見学／インタビュー） 国立天文台（見学／インタビュー） 上野アメ横（見学） 国立科学博物館（見学）

写真６　大学訪問（左）　会社訪問（中）　国立国会図書館訪問（右）

例えば、文化教育施設を訪問したチームは、国立国会図書館を訪問した際、国会の本会議場や委員会議場の見学もでき、たまたま国会の党首討論を目撃して、宿に帰ってからそのシーンをテレビニュースで見るという珍しい経験をしたり、国会内で某政党の党首と遭遇して一緒に写真に収まったりという経験をした。ファッションをテーマにしたチームは、最先端を行くファッション産業のマーケティングの考え方や、いかに流行を作り出すかという戦略、新商品を世に送り出す勢いなどを聞き取る中で、ファッション産業といっても会社によって大きく戦略が異なることに気づいていく。たまたま某店舗の店長婦人が自分たちの先輩（本校の卒業生）で、思いがけない歓待を受けることもあった。

夕食後にはやはりチームごとに振り返りの時間をもち、クラス全体に取り組んだことと成果、翌日の予定を発表した。相互に質疑もなされ、極めて充実した時となった。

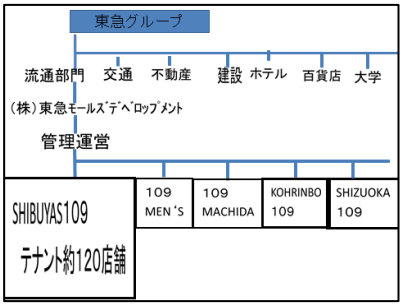
写真７　クラス・ミーティングの様子

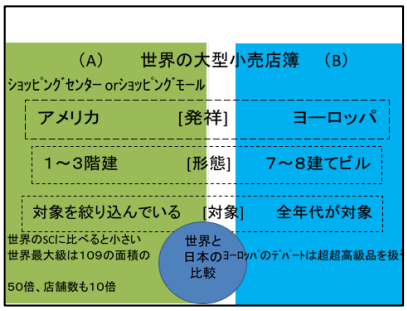
事後まとめ

前年度と同様、帰校後、事前学習とキャンプでの調査を総合し、学びの成果をパワーポイントにまとめる作業を行った。まずクラス内でチーム相互の報告会を行い、教員と生徒の相互評価により代表 1 チームを選び、全校での校外学習会で報告を行った。

代表に選ばれたのはファッションをテーマに取り上げたチームである。このチームのキャンプでの活動の様子は上で紹介したとおりだが、マーケティングや流通といった経済学的な視点から切り込んだ報告に下級生は息をのんで聞き入っていた。惜しむらくは社会科、とくに公民の授業における経済的分野の学習と結びつけるとさらに視野が広がったのだが、既存の教科との関連を意識することが少なかったのは後述するように我々の指導における今後の課題である。

「ファッション」チームのスライドの一部





ただし、全校の校外学習発表会は今回よりやや工夫を加えたことを付言したい。それは、各学年の報告の後、質疑応答の時間を設けたことである。

これまでは時間の関係上、質疑は行わなかった。しかし、昨夏の文化祭で学習発表を行ったとき、来校された聴衆の声の中に、「インターネットで調べて分かる域を超えていないものもあるのではないか」「質疑応答などやりとりがほしい」という意見があった。全国の PBL フェスタでも質疑の時間はあり、それが発表者への励ましにもなり、参加者全体の学びにもなる。そこで今回から予め質疑の時間を設けることを通知しておき、1 学年の発表につき 2～3 の質問を受けることとした。上級生は経験が豊富な分、下級生に対して手厳しい質問になる傾向があるので、「やさしく聞きなさい」という指導をした。

もう一つの工夫は、「相互評価シート」を用いたことである。自分のチーム以外の報告について、「良かったところ」「アドバイス（こうすればもっと良くなる）」を文章で書かせた。書かれた内容は、教員がチェックした上で基本的に全て各学年に届け、掲示する。中学生は大変真面目であり、一生懸命他者の良い点を見つけ、改善点を具体的に、しかも、じゅうぶんな配慮のもとに書いた。このことは PBL のプレゼン力向上に資するばかりでなく、学校全体の教導的な雰囲気を醸すのにも大変貢献したと考えている。

相互評価カードの例（2 年生に対して）

●良かったところ

写真があって分かりやすい。図があって、場所もよく分かる。

●アドバイス

声が小さい人が一部いるので声を大きくしたほうがいい。原稿を見てて目線が下なので、皆を見て話して欲しいです。時間がかかってしまったので、配分を考えたほうがいいと思います。

なお、3 年生はこの後プロジェクト・キャンプで得た知見を基に、各人の主題研究に取り組んでいる。主題研究は本来 4 年目すなわち高校 1 年生での海外研修の後に行うものであるが、この学年は人数が少なく、さらに転コースする生徒もいるめ、学校の定める海外研修の最少催行人数を満たさず、2013 年度の海外研修は実施できなくなった。そのため、1 年前倒しで主題研究に取り組むことにしたものである。2 月中にクラス内発表会を行い、代表が 3 月の学習発表会でプレゼンテーションを行った。